

白居易の詩における〈自稱〉表現

——宗教・謙稱・姓字に即して——

高橋 良行

〈目次〉

- 一 はじめに
- 二 宗教的、趣味的〈自稱〉表現
- 三 謙稱・卑稱的〈自稱〉表現
- 四 姓・字による〈自稱〉表現
- 五 結語

一 はじめに

白居易の詩には、「我」「吾」「余」「予」などの一人稱代名詞を除いて、自らを對象として認定、自認する「〈自稱〉表現」が、数多く見られる。私見では、そうした〈自稱〉表現は、二百数十種、數百例に及ぶと考えられる。

それらの一部は複合的な表現となっているため、截然と

區分することは難しいが、筆者は、先に、白居易の官職・身體・年齢・詩酒に關連した〈自稱〉表現について小論を書き、そうした〈自稱〉表現から読み取れる白居易の心理や内面世界の一端について、初歩的な分析と考察を行った。⁽¹⁾

小稿では、紙幅の關係で言及できなかった〈自稱〉表現、すなわち佛教や道教など宗教的なもの、及び花木や庭園など趣味的なもの、謙稱・卑稱的なもの、姓や字によるもの、その他について、前稿と同じく主な作例に即して初歩的な検討を加えたい。(なお、前稿・小稿ともに、客體化を装った表現も、すべて〈自稱〉表現として扱っている。)

二 宗教的、趣味的〈自稱〉表現

白居易の生活と人生に深い影響を與えた佛教や道教などの宗教、及び隱遁に由來する〈自稱〉表現として、以下のようなものがある。

居士・病居士・瘦居士・老居士・白衣居士・白衣・淨名居士・詩僧・靈山客・弟子・長齋客・醫王・毘耶長者・道士・渭浦棲遲客・園公・商嶺老人・中隱士・商皓・枚叟・滄浪子・漁翁・陶元亮など

まず、「居士」の自稱から見ていきたい。白居易は、江州時代から僧侶とは深い交流があったが、杭州刺史以降、齋戒を始め、長慶末年からは本格的に佛道修行を行っている^③ので、文字通り在家信者たる居士を名乗るのは自然なことであった。開成三年（八三八、六十七歳）の作「自詠」（卷六十七 三三八〇）には、次のように詠じている。

鬚白面微紅 鬚白くして 面微かに紅なり

醺醺半醉中 醺醺たり 半酔の中

百年隨手過 百年 手に隨ひて過ぎ
萬事轉頭空 萬事 頭を轉じて空し

臥疾瘦居士 臥疾す 瘦居士

行歌狂老翁 行歌す 狂老翁

仍聞好事者 仍ほ聞く 好事の者

將我畫屏風 我を將つて屏風に畫くと

前半四句では、病中、半酔の面貌と時の速さへの感慨を述べ、該句には、この時の白居易が自ら思い描く、病氣がちな瘦せぎすの在家佛教信者と、行吟する詩にとりつかれた老人という自畫像の両面が描かれている。第七・八句によれば、そうした白居易を屏風に描く人がいるというのもおもしろい。

また、長慶四年（八二四、五十三歳）、杭州刺史の時の作「北院」（卷五十三 二三四二）には、「還如病居士、唯置一牀眠」、私はやはり病氣の居士のように、ただひとつのベッドを置いて眠るだけだ、とあり、「居士」に身體の情況を表す「病」が附加されている。後の會昌二年（八四二、七十一歳）、白居易の妻の兄である楊汝士からの書簡に返事として送った「以詩代書、酬慕巢尙書見寄」（卷

六十九 三五八〇)でも、病氣の居士たる自己を表明している。

開成三年頃、酒好きの皇甫暉から再び酒を勧められたのに對し、戯れに答えた「戲皇甫十再勸酒」(補遺卷十三七六七)では、「淨明居士」と稱して、自らを居士の元祖ともいふべき維摩詰になぞらえており、他の詩では、同じく維摩詰を意味する「毘耶長者」や、在家居士を意味する「白衣」「白衣居士」という自稱も見られる。また、長慶四年、太子左庶子分司の時の「愛詠詩」(卷五十三 二二七〇)

では、「坐倚繩牀閑自念、前生應是「詩僧」と、自らを中唐あたりから出現する「詩僧」に擬した作もある。なお、「香山居士」は晩年の最も重要な自稱詞だが、「醉吟先生」と同じく、詩の本文には見られないので、ここでは言及しない。

居士のほかに「道士」という自稱も見られる。會昌元年(八四一、七十歳)の作「病中數會、張道士見讖、以此答之」(卷六十九 三五六七)には、「張道士輸白道士、一盃沈瀆便逍遙」と言う。白居易が病氣中にもかかわらず度々酒宴に参加したのを、張道士にとがめられたのに對して、答えた戯れの詩。白居易は、江州司馬の時、廬山の僧侶の他に道

士とも交わり、自ら仙藥を焼成することもあったが、晩年はもっぱら佛教に歸依している。しかし、道士との交遊も變わりなく續いていて、ここでは、相手の張道士に合わせ、自らを「白道士」と自稱している。

ところで、白居易は官僚の身のまま、吏隱をとまえ、中隱を樂しんだことで知られる。そうした隱遁的生活態度と關連する自稱詞として、商嶺老人・中隱士・滄浪子・漁翁などが見られるが省略する。

こうした宗教的及び隱遁的(自稱)表現の他に、あえて便宜的に言えば、松竹や花卉、庭園などにまつわる趣味的(自稱)表現とも言うべきものも少數ながら見られる。(茶に關する「別茶人」については、既に前稿で述べた。)

たとえば、長慶二年(八二二、五十一歳)、中書舍人の時、長安新昌坊に構えた自宅の庭の十本の松を詠じた「庭松」(卷十一 〇五六八)には、「未稱爲松主、時時一愧懷」と言う。高さもまちなまちな十本の松は、四季折々に美しい風情を見せ、白居易らの目を樂しませ心を癒やしてくれる益友だと贊美した後、自分はまだ俗人で官界を走り回っているので、いまだこれらの松の主人とは言えず、しばしば恥

ずかしい思いにとらわれている、と述べている。「未稱爲」という謙遜による否定形ではあるが、邸宅の主たる白居易は、當然その園内の松の主でもある。松への思いは、邸内の書齋に「松齋」と命名したことからもうかがえよう。もつとも、白居易は松以上に竹を好み、〈詠竹詩〉は多いが〈詠松詩〉は少ないという指摘があるが、その竹にまつわる自稱詞は見られないようである。

四年後の寶曆二年（八二六、五十五歳）、蘇州刺史の時の「花前歎」（卷五十一 二二〇九）には、「南州桃李北州梅、且喜年年作花主」とある。春、花の前にて年老いることを歎いたものだが、樊・李・呉・韋ら友人達は皆土に歸したことと對比しつつ、私はひとまず毎年、江南の桃や李、北方の梅の主人となれることがうれしい、というもの。

また、同じ年に洛陽の居宅を思つて詠じた「懷洛中所居」（卷五十五 二五二六）には、「幸是林園主、慙爲食祿宰」とあり、類似の自稱として「西亭主」「小園主」などがある。また、會昌五年（八四五、七十四歳）の作「齋居春久感事遺懷」（卷七十一 三六三八）では、「看花人」「龍門主」「兔苑賓」という自稱詞も見られる。

以上の他に、分類しがたいその他の單發的な〈自稱〉表

現として、太原一男子・愁人・行路子・俗士・白面書郎・聲華客・望鄉客・忘機客・少年人・曝背翁・羈遊子・訪戴客・先生・履道叟・饑叟・多思人などがあるが省略する。

三 謙稱、卑稱的な〈自稱〉表現

白居易の〈自稱〉表現には、表面的には自己卑下的な謙遜を伴いつつ、實際には自己の生き方を誇りとする矜持を秘めた謙稱、卑稱的な〈自稱〉表現が数多くある。それらは、次のように、不才・愚・狂・野・閑などの否定的な形容語を伴う自稱詞である。

不才者・不才身・不才叟・愚・愚叟・愚夫・愚翁・野人・野客・野夫・野叟・野翁・田野翁・野田鶴・田舍翁・狂酒客・詩狂客・狂賓客・狂歌客・狂夫・狂老翁・狂叟・老狂・狂翁・楚狂・蹇薄者・懶慢者・山中人・沈冥子・愁人・愁翁・潦倒客・沈冥客・遷客・山客・人間閑散物・閑人・貧翁・事了人・閑叟・葛天遺民・棄官人・生人・遺老・獨眠人・獨行者・獨吟人・獨宿翁・獨往客・獨遊人など

まず、自らを「不才」と稱する詩から見ていこう。元和年間、下邳退居時の作「養拙」(巻五 〇二〇〇)には、名利とは無縁な自由な生き方への願望を述べた後、「始知不才者、可以探道根」と言う。初めて悟った、私のような不才の者こそ、道の根源を深く探求することができるのだ、ということ。——この時期は母の喪に服するための退居生活であって、左遷ではないが、官界の現場から離れている焦燥感のようなものが、ことさらに官界とは無縁な生活の価値を強調させているのであろう。「不才者」の語は、元和十一年(八一六、四十五歳)春の「春遊二林寺」(巻七 〇二九二)や、大和三年(八二九、五十八歳)の「問秋光」(巻五十二 二二七八)にも見られる。

元和十四年(八一九、四十八歳)、江州から忠州に刺史として赴任した時、初めて瞿塘峽に入って感慨を詠じた「初入峽有感」(巻十一 〇五二五)では、晝なお暗き瞿塘峽の斷崖絶壁と激流を描寫した後、「常恐不才身、復作無名死」、私のような時運と命運とが合合わない不才の身は、常にこのまま人知れず死ぬことを恐れている、と述べている。この「不才身」は、長慶二年、中書舍人の時、恩賜の櫻桃に感じて詠じた「與沈楊二舍人閣老同食救賜櫻桃、玩物

感恩、因成十四韻」(巻十九 一二七六)や、長慶四年、太子左庶子分司の時の「分司」(巻五十三 一三三八二)にも見られ、恵まれた状況下でも用いられている。

また、約十年後の大和八年(八三四、六十三歳)、太子賓客分司の時の作「飽食閑坐」(巻六十三 三〇〇六)でも、「唯此不才叟、頑慵戀洛陽」とある。文宗の御代に、才知ある人々は官場で奔走しているが、ひとりこの不才の老人だけは、「頑固で怠惰ゆえ、洛陽での暖衣飽食の生活が好きなのだ、と述べている。なお、これらの他にも、自己を不才という詩が八首見られ、他詩人と比べて多くの用例を見せている。⁽⁵⁾

みずからを「愚」と規定する自稱詞も多く見られる。次は、大和八年、太子賓客分司の時の作「洛陽有愚叟」(巻六十 三〇〇五)。

洛陽有愚叟、白黒無分別。

浪跡雖似狂、謀身亦不拙。

點檢盤中飯、非精亦非糲。

點檢身上衣、無餘亦無闕。

天時方得所、不寒復不熱。

體氣正調和、不飢仍不渴。

閑將酒壺出、醉向人家歇。

野食或烹鮮、寓眠多擁褐。

抱琴榮啟樂、荷鍤劉伶達。

放眼看青山、任頭生白髮。

不知天地內、更得幾年活。

從此到終身、盡爲閑日月。

冒頭の第一句がそのまま詩題となっており、「洛陽の愚叟」たる白居易の、客體化を装った自畫像となっている。

この愚叟は、物事の黑白も分別できず、行いを恣にするところは狂人に似ているが、身の處し方は拙ではない。衣食は過不足なくあり、身も健康で、酒や琴、睡眠も自在に楽しんでいて、このまま命が盡きるまで自由に生きよう、と結ばれている。現役官僚のにおいを感じさせない、まるで市中の隠者のごときありようであり、洛陽に退居して吏隱を樂しむ白居易の生活が、網羅的に描かれている。ちなみに、この詩の「抱琴榮啟樂」から「盡爲閑日月」までは、「醉吟先生傳」(卷六十一 二九五三)にも「因自吟詠懷詩云」

として、ほぼそのまま引用されており、白居易としても閑適の境地を描いた會心の作のひとつであったのだろう。

また、開成元年(八三六、六十五歳)、祕書監の吳方之に戯れに酬い、あわせて劉禹錫に呈した「吳祕監每有美酒、獨酌獨醉、但蒙詩報、不以飲招、輒此戲酬、兼呈夢得」(卷六十六 三二九〇)では、「愚夫」と稱し、會昌年間、自己の人生觀を述べた「感所見」(卷七十一 三六四五)では「愚翁」と稱している。「愚夫」も「愚翁」もまた謙稱であるが、むしろそこにはプラスの價値が込められている。

「不才」・「愚」とともに、官とは距離を置いた自由なイメージを内在する「野」字も、自稱詞の修飾語として多く見られるものである。それらの多くは、朝官でありながら、自らを在野の士と同一視する對比的な表現として用いられている。たとえば、長慶二年の「訪陳二」(卷十九 一二八三)では、「出去爲朝客、歸來是野人」とあり、大和八年、洛陽で太子賓客分司の時の作「拜表、迴閑遊」(卷六十四 三二二六)でも、「晨興拜表稱朝士、晚出遊山作野人」とあって、どちらも同じ私が、一日の内に朝客・朝士と野人という二身を生きていることを詠じている。⁶⁾「野

人」の語は、元和年間の「宴周皓大夫光福宅」（卷十四〇七四）や、開成二年（八三七、六十六歳）の「和裴令公一日日一年年雜言見贈」（卷六十二 三〇〇三）でも用いられている。

また、長慶二年、杭州刺史の時の「閑夜詠懷、因招周協律・劉・薛二秀才」（卷二十 一三三四）でも、「世名檢束爲朝士、心性疎慵是野夫」とあつて、名利のために朝廷に仕える自己と、心の本性は在野の士そのものである自己とが、對比的に詠じられている。さらに、元和年間、翰林學士の時の「曲江獨行」（卷十四 〇七〇九）や、元和十一年、江州にての「北亭招客」（卷十六 〇九二三）では「野客」、續く元和十五年（八二〇、四十九歳）、忠州刺史時代の「臥小齋」（卷十一 〇五五五）では、「田野翁」の自稱を用いた對比的な表現が見られる。なお、大和七年（八三三、六十二歳）、太子賓客分司の時の「秋池獨汎」（卷六十二 二九七〇）では「野叟」と稱し、會昌元年の「偶吟」（卷六十九 三五六四）では「野翁」、洛陽での退官後の作「閑坐」（卷七十一 三六二七）では、「田舍翁」とも謙稱している。

白居易の詩における「自稱」表現（高橋）

ところで、「不才」や「愚」「野」以上に、白居易が自己認定として強調したのは、「狂」であつた。『論語』「微子篇」の楚狂接輿の故事にみられるように、中國古代の知識人と「狂」には、歴史的、文化的に深い關係がある。白居易においても、「狂」という觀念は、その人間性や詩歌を理解する上で重要な要素である。この點については、つとに二宮俊博「洛陽時代の白居易——「狂」という自己意識について——」において、自稱詞も含めて詳細に論じられている。以下、二宮論文も参照しつつ述べたい。

白居易が「狂」字を自稱の語の修飾語として用いた作として、たとえば、大和八年の作「問少年」（卷六十五 三二七四）がある。

千首詩堆青玉案	千首の詩は青玉の案に堆く
十分酒寫白金盃	十分の酒は白金の盃に寫ぐ
迴頭卻問諸年少	頭を迴らして却つて諸を年少に問ふ
作箇狂夫得了無	箇の狂夫と作り得了らんや無やと

確かに私は多くの詩を作り、酒をいっぱい飲んでいますが、君たち若者に問いたい。果たして君たちは私のような

狂人になりおおせることができようか。——生涯、過度な作詩と飲酒に徹することができた自負と誇りが、「狂夫」という自稱にはこめられていよう。同時に、最終句からは、この「狂夫」が、白居易の意志的な所産であったことがよくわかる。

「狂夫」の語は、開成二年、「又戲答絕句」(卷六十七三三四〇)にも、「狂夫與我兩相忘、故態些些亦不妨」と見られる。「酬思黯戲贈」(卷六十七 三三三九)に對して牛僧孺が寄せてきた絶句に、更に戯れに答えたもので、末句では自らを楚の狂人接輿にもなぞらえている。三三三九詩の尾聯でも、「眼看狂不得、狂得且須狂」と「狂」字を三度用いて、牛僧孺のような權力志向とは無縁な生き方をする自己を、誇らしく「狂夫」と稱しているのである。

ちなみに、杜甫は白居易よりも早く「狂夫」を自稱詞として用いているが、杜甫の場合は官職を離れ、友の支援もなく、生活に困窮した自己に對する自嘲の語として用いており、白居易の用法とは大いに異なっている。⁸⁾

時期は前後するが、大和三年、太子賓客として洛陽に赴任する時、あらかじめ東都留守の令狐楚に寄せた「將至東都先寄令狐留守」(卷五十七 二七三二)には「東都添箇狂

賓客、先報壺觴風月知」と稱している。友人ゆえの諧諷的な挨拶の自稱だが、おのずから赴任後の自己の政治的立ち位置を示したものともなっている。なお、官職名に「狂」がつくのは、この「狂賓客」のみである。

十年後の開成四年(八三九、六十八歳)の「白髮」(卷六十七 三三三九七)には、「歌吟終日如狂叟、衰疾多時似瘦仙」というように、「狂叟」の語も見える。白居易の人生と不可分な歌吟(詩作)と衰疾(身體)に即した自己規定の語といえよう。また、會昌年間、自己の官僚としての生涯を顧み、俸錢を與えられ、天壽をも與えられた幸福を若者たちに説いた「贈諸少年」(卷七十一 三六四四)は、先に擧げた「問少年」と通じる作だが、「少年莫笑我蹉跎、聽我狂翁一曲歌」と、みずからを「狂翁」と稱している。

この他、「自詠」詩では「狂老翁」と稱し、「酬舒三員外見贈長句」(卷六十四 三〇六五)では「狂客」、「答勸酒」(卷十五 〇八四〇)では「狂酒客」、前稿既出の「郢州贈別王八使君」(卷二十一 一三二八)では「詩狂客」、「履道居三首(其三)」(卷五十七 二九〇六)では「狂歌客」、「遇物感興、因示子弟」(卷六十九 三五二九)では「老狂」と自稱している。

このように「狂」字を用いた〈自稱〉表現は、晩年の洛陽時代の詩に多く見られるが、それは、苛烈な牛李の黨争に巻き込まれることなく、官界における自らの立ち位置を絶妙に守るため、詩酒に耽溺してきた人生に自ら意圖的に附與した稱號といえよう。

換言すれば、中國古典における「狂」(佯狂)の歴史と同じく、白居易の場合も、常に士人社會、世間を意識した雙方向的な〈自稱〉表現でもあったということであろう。白居易の詩に、他者から狂なる者と稱されたことを詠じた作があることは、このことを傍證している。

例えば、長慶三年(八二三、五十一歳)の作「二月五日夜下作」(卷二十 一三五八)では、「只有且來花下醉、從人笑道老顛狂」とあり、開成二年、劉禹錫に贈った「贈夢得」(卷六十六 三三二〇)では、「聞道洛城人盡怪、呼爲劉白二狂翁」とある。こうした詩句からは、洛陽の人々による他稱がまんざらでもない心情が見てとれよう。

「狂」字にまつわる他者からの呼稱という點で言えば、洛陽時代の「狂」とは趣が異なるが、早くに元和年間、左拾遺・翰林學士在任中、唐衢に寄せた「寄唐生」(卷一〇三三三)にも、「人竟無奈何、呼作狂男兒」とある。理不

盡な政治的事象に對して、秦中吟・新樂府などの諷諭詩を作り、要路の者たちを批判してきた私のことを、人々は「狂男兒」と稱するようになった、と述べている。

これらの他にも、謙稱的と思われる自稱、自認の語は多く見られる。元和五年(八一〇、三十九歳)の「自題寫眞」(卷六〇二二九)や、元和九年(八一四、四十三歳)の「遊悟眞寺詩 一百三十韻」(卷六〇二六四)では、「山中人」と謙稱し、江州司馬時代の「答故人」(卷七〇二八二)では、「蓬華人」(あばら家育ちの人)、「江南謫居 十韻」(卷十七 一〇〇八)では、「沈冥客」(零落した逐客)とあつて、司馬たる自己をいささか自嘲氣味に自稱している。

さらに大和九年(八三五、六十四歳)の「從同州刺史改授太子少傅分司」(卷六十六 三三三四)では、自らを「閑人」と稱し、會昌二年の「閑坐看書、貽諸少年」(卷六十九 三三三八)でも「閑叟」と稱して、晩年の自己を「閑」の語でも自稱、自認している。

開成五年(八四〇、六十九歳)の「談氏外孫生三日、喜是男、偶吟成篇、兼戲呈夢得」(卷六十八 三四五〇)では、自らを「貧翁」と稱しているが、翌會昌元年、致仕するこ

とになって、胸中の喜びを述べた「百日假滿、少傳官停、自喜言懷」(卷六十八 三四九〇)では、「人言世事何時了、我是人間事了人」とも言っている。「事了人」とは、私はこの世では俗事(政治)と關わることの終わった人間なのだ、という意味で、この最終二句には、「人・事・了」の語が反復連用されていて、音聲的にも一種の輕みを生み出している。

同年の「昨日復今辰」(卷七十一 三六一七)では、一般人を意味する「生人」とも稱しており、實際に致仕した會昌二年の「不出門」(卷六十九 三五四四)では、「祖跣北窗下、葛天之遺民」と、自らを太古の聖天子葛天氏の遺民とも稱している。このように、致仕前後の白居易の心のありようが、こうした自稱詞からもうかがうことができよう。⁽¹⁰⁾

四 姓・字による〈自稱〉表現

さて、これまで見てきた様々な〈自稱〉表現に比べて、自己の姓や字を用いるのは、極めて直截的な〈自稱〉表現である。従来、自己の姓名や字を詩の本文において自稱することは、杜甫に少數の例はあるものの稀であり、白居易も名を自稱することは一例のみである。しかし、姓や字に

ついては、白・白老・白翁・白叟・白道士・白家・白家翁・白贊善・白司馬・白太守・白使君・白舍人・白庶子・白監・白侍郎・白尹・白賓客・白少傅・白尙書・白樂天・樂天のように多く見られ、他の詩人と比べてひとつの顯著な特徴となっている。⁽¹¹⁾

既に西村富美子「白居易における《白》に對する意識の二重構造——姓の《白》及び色彩の《白》——」⁽¹²⁾において、白居易は、父祖の代まで寒族であった自らの氏族の名を歴史に刻むため、意識的に詩の中で「白」字を多用しており、「白」字を冠した官名が多々見られることが指摘されている。以下、西村論文をもふまえた上で述べていきたい。

まず、姓の「白」を劉禹錫の「劉」と併稱的に用いた詩として、既に舉例した「贈夢得」の他に、開成三年の作「晚夏閑居、絕無賓客。欲尋夢得、先寄此詩」(卷六十七 三三六四)や、會昌二年秋の「哭劉尙書夢得 二首(其一)」(卷六十九 三六〇二)、その他がある。劉禹錫との併稱は、開成二年、東都留守の牛僧孺から小宴の場で詩を贈られたのに對し、劉禹錫とともに酬いた「同夢得酬牛相公初到洛中小飲見贈」(卷六十六 三三三四)にも、「詩酒放狂猶得

在、莫欺白叟與劉君」と見られる。この「白叟」の語は、大和三年、洛陽で太子賓客分司の時、親友の崔玄亮に答えた「答崔十八」（卷五十七 二七四二）にも、「勞將白叟比黃公、今古由來事不同」とある。

同じく「白の老人」という意味で、「白老」や「白翁」の語も見られる。例えば、大和九年、洛陽の履道里の邸宅内にある池のほとりで作った「池上作」（卷六十三 三〇三五）には、「豈如白翁退老地、樹高竹密池塘深」とあり、自らの邸内の庭園のすばらしさを説いている。自邸で閑居の趣を詠じた「閑居自題」（卷六十三 三〇〇七）では、「此是白家翁、閉門終老處」と、「白家翁」とも自稱している。「白家」の用例は、後序や偽作の各一例を除いて九例あるが、「白家翁」と自稱するのはこの一首のみである。

西村論文で指摘されているように、この「白」姓を官職名に冠した自稱詞も多く見られる。以下、時系列的に例示すれば、早くも元和十年（八一五、四十四歳）、太子左贊善大夫の時、「白牡丹」（卷十五 〇八四八）で、「應似東宮白贊善、被人還喚作朝官」と詠じている。愛翫する人の少ない白牡丹でも、牡丹と稱されているのは、東宮の贊善大夫

たる私白居易が、人々から朝官と呼ばれているのと同じだ、というもの。やや自嘲の氣味を含みつつ、白牡丹への愛好と、白姓への自負とが融合している。

また、元和十二年（八一七、四十六歳）、江州で迎えた歳暮の感慨を、長安にいる元宗簡・庾敬休に寄せた全二十句の排律「潯陽歲晚、寄元八郎中・庾三十二員外」（卷十七 一〇一〇）の最終二句には、「可憐白司馬、老大在湓城」とあり、「白司馬」の語は、同年の「夜送孟司功」（卷十七 一〇四四）にも用いられている。

長慶四年、蘇州刺史の李諒から贈られた元日の所感の詩に和し、元稹にも呈した「蘇州李中丞、以元日郡齋感懷詩寄微之及予、……」（卷五十三 二三二五）の冒頭には、「白首餘杭白太守、落拓拋名來已久」と稱している。白頭の杭州の白太守は、落魄して名も捨てること既に久しい、と述べ、以下、衰老の自己を誇張氣味に語りつつ、隣州にいる友人の李諒や元稹との通信を願っている。「白太守」の自稱は、同じ長慶四年の「題石山人」（卷五十三 二三三四）でも用いられており、「答次休上人」（卷五十四 二五一二）では、「太守」と同じく古風に「白使君」とも稱している。さらに、杭州刺史時代の友人、盧纘ろしんと再會して贈った

「贈盧纘」（補遺卷上）では、「白舍人」と自稱しており、長慶四年、廬山東林寺の遠禪師を思つての作「遠師」（卷五十三—三三七三）では、「東宮白庶子」と自稱し、禪師にお會いできるのはいつのことかと詠じている。

大和二年（八二八、五十七歳）早春、劉禹錫が宣武軍節度使の令狐楚に寄せた詩に、白居易が和した「早春同劉郎中寄宣武令狐相公」（卷五十五—二五五四）には、「誰引相公開口笑、不逢白監與劉郎」とある。これは劉禹錫の原詩の題に「白監」の語が用いられているから、いわばそれに呼應して白監と自稱したのであろう。

續く大和三年、熟成したばかりの黄醕酒を嘗めて、越州刺史から尙書左丞へ轉任して上京して來る元稹への思いを述べた「嘗黄醕新耐憶微之」（卷五十八—二八一六）には、「世間好物黄醕酒、天下閑人白侍郎」とある。世間の逸品たる黄醕酒、それに對する天下の閑人、白侍郎。——首聯のこのやや大仰な表現に、既に白居易の心の弾みが見てとれよう。「白侍郎」の語は、同年の「晚桃花」（卷五十八—二八二三）でも自稱されている。また、大和六年（八三二、六十一歳）の「嵩陽觀夜奏霓裳」（卷五十七—二七九八）には、「愛者誰人唯白尹、奏時何處在嵩陽」とあ

り、この開元の遺曲を愛する者は「唯だ白尹あるのみ」というところに、音樂に深い造詣があり、「長恨歌」の作者たる白居易の自負が込められている。

四年後の開成元年、賣りに出た白居易の隣家の王家宅を、楊汝土に買い取ることを勧めた「以詩代書、寄戶部楊侍郎、勸買東鄰王家宅」（卷六十六—三三七二）には、「莫學因循白賓客、欲年六十始歸來」とある。さらに、「題龍門堰西澗」（卷六十六—三三七五）には、「除卻悠悠白少傅、何人解入此中來」と言う。小さな谷川の菊花や柳樹、秋水の美を、私を除いて誰が知っていようか、という軽い自負の込められた自稱であり、二八二三詩や二七九八詩と同様の意識であらう。

最晩年の會昌二年、刑部尙書を以て致仕したことを詠じた「刑部尙書致仕」（卷七十一—三六二〇）の最終二句には、「唯是名銜人不會、毘耶長者白尙書」と言う。官を辭した今、世間の人々は、私の姓名も官位も知らない。私は、毘耶長者維摩詰の後身、白尙書さまなのだが、というもので、最後の一句には、一種のおどけ、ユーモアが含まれている。

以上見てきたように、姓の「白」は、主な官職名のほとんどに冠せられて自稱詞として用いられており、その多くに白居易の誇りや餘裕がにじみ出ていて、いわば白一族の自己顯彰ともなっている。ちなみに、『全唐詩索引』では、元稹には詩題・詩中ともに、白居易を「白+官職名」で呼ぶ例は見られない。しかし、元稹とは對照的に、劉禹錫の詩中には、白太守・白侍郎・白尹の語が見られ、詩題にはこれらの他に白監・白賓客・白少傅の語や、樂天少傅の語も見られ、「白太守行」(『全唐詩』卷三五五)なる歌行詩まである。

他にも、張籍は詩題に白學士・白拾遺・白舍人・白杭州・白使君・白侍郎と言ひ、楊巨源も詩題に白司馬・白舍人、姚合も詩題に白賓客・白少傅を用いている。このように、他者が詩題において「白+官職名」で稱することは自然なことである。しかし、それを詩中で自稱詞としてくりかえし用いるところに白居易の獨自性が見られる。なお、元稹や劉禹錫には、「姓+官職名」の自稱は見られない。

次に、「白居易」という姓名による自稱は、詩の本文としては、元和八年(八一三、四十二歳)の「七德舞」(卷五〇二二五)に「元和小臣白居易」と見られるのみで、他に

は、いわば改まった半ば公的な詩の序において二、三使用されている程度である。¹³⁾

姓と同様に「樂天」という字も、詩中において數多く用いられている。例えば、元和十年、長安にて自らに教え諭した全四十四句の歌謠「自誨」(卷二二一四三三)には、

「樂天樂天、來與汝言。汝宜拳拳、終身行焉。……樂天樂天、可不^レ大哀。汝胡不^レ懲往而念來。……樂天樂天、可不^レ大哀。而今而後、汝宜飢而食渴而飲。晝而興、夜而寢。無^レ浪喜、無^レ妄憂。病則臥、死則休。……遑遑兮欲安往哉。樂天樂天、歸去來」と言う。

全篇、「樂天樂天」という自己への呼びかけの語が、變奏的、重奏的に繰り返されており、世俗的な様々なしながらみの中で、心身をすり減らして苦しむより、自然の欲求に心身を任せて、限りある人生をすなおに生きることを勧められている。「樂天」は白居易の字であるから、意識的に作爲された自稱詞とは異なるが、自己を詩の主題として對象化しており、自意識の集中的な反映であることは間違いない。

ところで、白居易が、早くより自己の字を生き方と關連づけて意識していたであろうことは、これより約十年前、

永貞元年（八〇五、三十四歳）、永崇里の華陽觀で元稹とともに制科の受験勉強をしていた時の作「永崇里觀居」（巻五 〇一七九）において、「寡欲雖少病、樂天心不憂」と述べていることからうかがえよう。これは自稱詞としてではなく、寡欲な生き方をしているから、少し病むことがあっても、天命を樂しんで心に憂えることはない、という意味だが、その背後には自己の字のごとく生きたいという意識が見てとれる。元和六年（八一二、四十歳）の「渭村退居、寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩 一百韻」（巻十五 〇八〇七）にも、同様の「樂天無怨嘆、倚命不動勳」という表現が見られる。

こうした自意識は、大和八年、少年の問いかけに答えた「少年問」（巻六十五 三二七三）の「號作樂天應不錯、憂愁時少樂時多」にも現れている。該句は、若者が白居易に、なぜ毎日酒に酔っては歌を歌っているのかと尋ねたことへの答えて、樂天と號したのは、ほかならぬ天が私を樂しませてくれるからだ。愁える時はほとんどなく、樂しいことばかりだ、というもの。ここには、白居易が樂天という字を天與のものと考えており、プラスの意味づけを明確に自覺していたことがわかる。また、洛陽時代の開成四年の

「追歡偶作」（巻六十七 三三九八）でも、老いてなお歡樂を求める自己を詠じて「樂天」と自稱しており、こうした自覺をうかがうことができる。

もつとも、「樂天」という字を用いた自稱は、マイナ斯的な情況のなかで詠じた詩においても用いられている。例えば、長慶二年七月、杭州赴任の途次、今は亡き李杓直・崔虞平の二人の友を思つて感慨を記した「商山路有感」（巻二十 一三一〇）や、開成元年、貶所の虔州で死去した楊虞卿（妻楊氏の從兄）を洛陽に歸葬した時の「哭師臯」（巻六十五 三〇四二）等である。

さらに、開成四年十月六日朝、「風疾」を發症した白居易は、年末に至るまでに「病中詩 十五首」という連作を詠むが、其の二の「枕上作」（巻六十八 三〇〇九）は以下のようにである。¹³⁾

風疾侵凌臨老頭	風疾 侵凌す 老に臨む頭 <small>こゝろ</small>
血凝筋滯不調柔	血凝り筋滯りて 調柔ならず
甘從此後支離臥	甘んじて此より後 支離して臥し
賴是從前爛慢遊	賴 <small>さいは</small> ひに是れ前に從ひて 爛慢として遊ぶ

迴思往事紛如夢

迴思すれば 往事 紛として夢の
如く

轉覺餘生杳若浮

轉た覺ゆ 餘生 杳として浮かべ
るが若きを

浩氣自能充靜室

浩氣は自ら能く靜室に充ち

驚颯何必蕩虛舟

驚颯 何ぞ必ずしも虚舟を蕩かさ
ん

腹空先進松花酒

腹空しくして 先づ進む松花の酒

膝冷重装桂布裘

膝冷えて 重ねて装ふ桂布の裘

若問樂天憂病否

若し樂天に病を憂ふるや否やと問
はば

樂天知命了無憂

天を樂しみ 命を知りて 了つひに憂
ふる無し

この詩からは、肢體の不如意や餘生への不安を覺えつつも、浩然の氣はなお體内に満ちており、病氣に負けない姿勢が見てとれる。最終二句は、もし、樂天たる私に病氣を憂えているかと尋ねられたら、天命を樂しみ天命に従っているから、全く憂いはないと答えるだろう、というもの。假定の問答を設定し、前句の「樂天」は白居易の字だが、

白居易の詩における〈自稱〉表現（高橋）

後句では、『周易』「繫辭上傳」の「樂天知命」の語句に連續させて、病中の心境を吐露している。このような非常の事態においても、一種の言語遊戯的な措辭となっており、究極のマイナス的な情況下だからこそ、「樂天」という字がより効果的な表現となっている。

この時、病中に詠じた五言絶句「病中 五絶（其三）」（卷六十八 三四一三）でも、「多幸樂天今始病、不知合要苦治無」と言う。親友の李建や元稹の亡き後も、私樂天は幸いにも今初めて病氣になったので、ねんいりに治療すべきかわからない、というもの。ここでは、「樂天」という自稱が、「多幸」という形容語によって、いっそう強調されている。

同じく開成四年、愛馬を賣りに出し、別れに臨んで詠じた「賣駱馬」（卷六十八 三四一八）や、翌開成五年三月三十日の「春盡日、宴罷感事獨吟」（卷六十八 三四四六）にも用いられていて、愛馬と愛妓の樊素を失った寂寥が、字の「樂天」とは反義的に詠出されている。

以上の作例を見ると、「樂天」という自稱は晩年に増えるが、内心の自己への呼びかけや亡友との永別、病中の感慨や愛馬・愛妾との別れ、半生を顧みての胸中の吐露な

ど、情況のプラス・マイナスにかかわらず用いられている。そして、時には、詩中における「樂天」という字は、たんなる字を超えて、白居易の内面世界そのものと一體化した自稱詞となつていたと思われる。

さて、姓と字をとともに用いた例も見られる。元和十二年、香爐峯の北麓、遺愛寺の西邊に新たに草堂を建て、胸中の思いをその場で石に記した「香鑪峰下新置草堂、即事詠懷、題於石上」(卷七 〇三〇三)には、「……時有沈冥子、姓白字樂天。平生無所好、見此心依然。如獲終老地、忽乎不知還。……」と言う。

詩はまず草堂の周圍の白石・清流・松竹が揃った美しい風景を描寫した後、江州に沈淪する男(沈冥子)がいて、その姓は白、字は樂天といわば名乗りをあげている。そして、この山こそ自分が歸着するにふさわしい超然とした場所であることを揚言しているが、それは陶淵明亡き後數百年、廬山の美の新しい住人としての、いわば宣言とも言うべき表現であろう。この詩は、時期的に見ても、白居易が早くより自己の姓や字を詩に詠み込むことに自覺的であったことを示している。

そして、自己の字を詩題とし、詩の冒頭と最終句で姓と字を連用している最晩年の「達哉樂天行」(卷六十九 三五四七)こそ、白居易の〈自稱〉表現の極めつけともいふべき作品であろう。

達哉達哉白樂天、分司東都十三年。
七旬纔滿冠已挂、未祿半及車先懸。
或伴遊客春行樂、或隨山僧夜坐禪。
二年忘卻問家事、門庭多草厨少煙。
庖童朝告鹽米盡、侍婢暮訴衣裳穿。
妻孥不悅甥姪悶、而我醉臥方陶然。
起來與爾畫生計、薄產處置有後先。
先賣南坊十畝園、次賣東都五頃田。
然後兼賣所居宅、髣佛獲緡二三千。
半與爾充衣食費、半與吾供酒肉錢。
吾今已年七十一、眼昏鬚白頭風眩。
但恐此錢用不盡、即先朝露歸夜泉。
未歸且住亦不惡、飢餐樂飲安穩眠。
死生無可無不可、達哉達哉白樂天。

會昌二年、七十一歳の時、洛陽時代の十年をふりかえつて、權力にとらわれず、世俗を超越して生きてきた自らの人生を、年數や家産に即した多くの具體的な數詞表現を交えつつ、總括して詠じた詩である。部分的には、先に擧げた「自誨」詩への二十七年後の答詩ともいえる作である。

元來、白居易は誰よりも自己肯定の名人であったが、この詩は全篇そうした態度で一貫しており、究極の自畫自贊の詩となっている。「達」とは、たんなる「放達」（物事にこだわらず氣ままなさま）の意味を超えて、人生の達人とでもいえる自己を肯定する言葉であろう。また、『論語』「微子篇」の孔子の語をふまえた「死生無可無不可」は、白居易としては、思い通りに生きてきた自分の人生は、そう悪いものではなかった、ということであろう。

冒頭の句と最終の句は、詩題そのものにもなっており、白居易の自己肯定感がより強く表出されている。いかなる實人生にも幸不幸は混在するはずだが、そうした實人生に即した回顧でありながら、不幸とは無縁のこうした表現は、詩人としての白居易の確固たる意志の反映でもある。他者が白居易の生き方を評して「達哉」と詠じることが考えられても、白居易みずから「達哉」と自己を褒

め、高く肯定している點は、やはり特異といふべき作である。

五 結語

以上、前稿に續いて、三つの視點から白居易の〈自稱〉表現について検討してきた。結論的に述べると、白居易は、晩年、佛教に傾倒し、厚く信仰したが、宗教的な〈自稱〉表現として、「居士」及びその複合形や「道士」、それに隱遁に關するものなどが見られる。

また、前稿で擧げた詩酒のうち、飲酒は趣味というより嗜好といふべきであろうが、關連する多種多彩な〈自稱〉表現が見られた。それに對して、花木や松竹、庭園、音樂などに對する愛好を、假に趣味的なものとするれば、これらに關する〈自稱〉表現はそれほど多くはない。ただ、その他の「行路子」「白面書郎」「聲華客」「忘機客」「曝背翁」「履道叟」「饑叟」など、ほとんど内容的に概括しがたい單發的な〈自稱〉表現は、數多く見られる。

これらに比べて、謙稱、卑稱的な〈自稱〉表現は、多種多彩である。不才・愚・狂・野・閑・獨など、表面上、字義的には負的價值を内在する語を冠した表現が、語によつ

て使用時期にややかたよりはあるものの、様々に用いられている。これらを通覧すると、江州左遷時の〈自稱〉表現には、確かに屈折した自己否定的な感情が看取されるが、それら以外の多くは、苛烈な政治の世界に身を置きながら、常に一步退いた地歩に在って、自己を保全し、自己の本性を養ってきた白居易の、反轉した價值觀の表明として用いられている。すなわち、一見、負的價值を内在する語こそ、視點を變えれば正的價值に轉換、變質させることが可能であり、そこには白居易の内なる自負や餘裕、遊び心などが込められているとみることが出来る。

白居易の官歴には、一時的な左遷や不本意な赴任はあったものの、その生涯は、總じて高級官僚としての經歷の連続であった。従って、こうした負的價值を内在した謙稱、卑稱的な自稱詞を、たとえば假に孟郊や賈島が用いた場合と比較すると、おのずからその意味合いの差異は明白となるであろう。つまり、そこには眞に深刻、痛切な自己否定や自己卑下を認めることはできず、多くはむしろ自尊心や精神的餘裕の反轉としての〈自稱〉表現を見て取ることが出来るのである。白居易の謙稱、卑稱的〈自稱〉表現も、つまるところは白居易に顯著な自己肯定の表出であったと

いえよう。

では、姓や字を用いた〈自稱〉表現はどうであろうか。「白」という姓を冠した〈自稱〉表現は、白叟・白老・白翁・白家翁・白道士などを除いて、その多くが官職名と結合して用いられている。白贊善・白司馬・白太守・白使君・白舍人・白庶子・白監・白侍郎・白尹・白賓客・白少傅・白尚書などがそれであり、主だった官職名の全てに冠せられている。官界での交際において、相手がこうした呼稱を用いるのは自然なこととしても、それをみずから詩の本文において繰り返し自稱詞として用いることは、他の詩人には見いだしがたい現象である。そこにも、白居易の自己愛的、遊戯的な精神を見て取ることが出来るが、他の〈自稱〉表現とはやや異なり、抜きがたい高級官僚としての自己意識と、家（白一族）意識とが結合した〈自稱〉表現ということができよう。

また、「樂天」という字も、「白」という姓と同じく、詩中において〈自稱〉表現として用いられている。「自誨」詩では、自己への呼びかけとして連用されているが、他の作例でも、自己の存在を強調する語として働いているように見える。そこには、「白」という姓への誇りと同様に、

「樂天」という字への強い愛着が見てとれる。「白」は、字義としては白い色彩及びそこから抽象化されるイメージを主として明示するものだが、『周易』に由来する「樂天」は、經典の語としての絶対的な意味とイメージを内包しており、容易に白居易の人生哲學へと化すことが可能な語であった。すなわち、「樂天」という字は、白居易が理想とする生き方や實現すべき人生の境地を集約した言葉として、いわば白居易のアイデンティティを擔保する言葉のひとつとして意識されていたと考えられる⁽¹⁶⁾。

加えて思うに、元稹や劉禹錫の詩には、詩題（や序・詩中）に、文字通り呼び名である字の「樂天」が、それぞれ約九十例前後も使用されており、それはおのずから白居易自身の字に對する愛着の念を増幅したのではなからうか。

さて、小稿で検討してきた白居易の多種多彩な〈自稱〉表現は、どのように理解すればよいのであろうか。表層的には、白居易の〈自稱〉表現は杜甫の〈自稱〉表現を承けているとも言えるが、兩者の精神構造には大きな差異があると思われる。今、その點について觸れるゆとりはないが、前稿での結論もふまえて再説すれば、詩歌も他の藝術

表現と同じく、つまるところは詩人の自意識や自我を中核とした自己表現に他ならない。詩中における白居易の〈自稱〉表現は、その自己愛的な過剰な自意識や自我の湧出、表出と、その結果としての自己投影的な自畫像と解釋するのが最も妥當であろう。

そして、そもそも自稱という言葉行爲は、他者との關係性において初めて意味を有する行爲である。白居易の多種多彩な〈自稱〉表現は、彼が、家族や親戚はもとより、士人社會において、多くの友人や知人たちと豊かな人間關係を築いたなかから（たとえ、そこに微妙な政治的、黨派的親疎や好惡の別が含まれていたとしても）、實際の實態に應じて自然發生的に自在に、時には遊戲的、自己演出的に生み出されたものである。具體的に述べることはしなかったが、白居易は友人達との寄贈・唱酬詩において、その自稱詞と類似した語を友人達に附與することもあり、友人達も白居易に附與している。その意味で、彼らをひとつの詩的共同體と見なせば、白居易自身も彼の知友たちも、その饒舌な〈自稱〉表現自體を楽しんでいたとも見ることができよう。

さらに附言すれば、元來、早くより古代中國の士人社會

には、異能の人物を併稱したり、綽名を附與して評語とする文化的土壤があった。自稱としても、晉の葛洪の「抱朴子」や梁の陶弘景の「華陽隱居」、唐の王績の「東臯子」や賀知章の「四明狂客」など、別號をもつ隱者や詩人が少なからず存在した。白居易の〈自稱〉表現も、そうした文化史のなかでとらえることも可能であろう。また、宋代中期以降、歐陽脩や司馬光などによって一人稱としての雅號の使用が始まり、それが士大夫社會に大流行するが、そうした現象の淵源に、白居易の〈自稱〉表現は位置していると考えられる。

注

- (1) 「白居易の詩における〈自稱〉表現——官職・身體・年齢・詩酒に即して——」(『中國文學研究』第四十四期、二〇一八年、参照。以下、小稿ではこれを「前稿」という)。
 (2) 以下、白居易詩の引用は〈那波本〉(四部叢刊本)に據り、花房英樹著『白氏文集の批判的研究』の作品番號を付すが、他本によって改めた箇所もある。また、「補遺」の作品は、〈新釋漢文大系本〉に據る。傍線は筆者。用例の檢索は平岡武夫・今井清編『白居易歌詩索引』(同朋舎出版、一九八九年)による。また、作詩の時點・地點・背景や解釋等については、基本的に岡村繁著『白氏文集 一〜十二下』(『新釋漢文大系』明

治書院、一九八八年〜二〇一七年)、朱金城箋校『白居易集箋校』全六冊(『中國古典文學叢書』上海古籍出版社、一九八八年)、謝思焯撰『白居易詩集校注』全六冊(『中國古典文學基本叢書』中華書局、二〇〇六年)等に據っている。

- (3) 白居易の居士としての意識については、平野顯照「居士を表明する白居易の心情」(『神田喜一郎博士追悼中國學論集』二玄社、一九八六年)、またその實態については、下定雅弘「齋戒する白居易」(『中國文史論叢』創刊號、二〇〇五年)、参照。

- (4) 朱金城『白居易研究』「讀白居易詩札記(三)」(陝西人民出版社、一九八七年、三一八頁)、埋田重夫「白居易における松と竹」(『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』研文出版、二〇〇六年)等、参照。

- (5) 自らを「不才」と稱する例は、〈寒泉〉の『全唐詩』では張九齡・劉憲・沈佺期・王維・劉長卿・孟浩然・韋應物・高適・杜甫・錢起・顧況・馮宿・權德輿などに見られる(劉長卿・孟浩然・杜甫が各2首、他は各1首のみ)が、白居易の用例の多さは顯著である。

- (6) 中唐の吏隱については、赤井益久「中唐詩壇の研究」(第V部 第一章 中唐における吏隱について)(創文社、二〇〇四年)、吉川忠夫「白居易における仕と隱」(『白居易研究講座』第一卷、勉誠社、一九九三年)、川合康三「宦遊と吏隱」(『中國讀書人の政治と文學』創文社、二〇〇二年)等、参照。

なお、谷口真由実「杜甫詩における自稱表現——『杜陵の野

老」を中心に——」（『文科の継承と展開 都留文科大學國文科五十周年記念論文集』勉誠出版、二〇一一年）によれば、杜甫の「野老」や「野客」は、本来の意味である在野の士を強調するものであり、白居易の用法とは異なっている。

(7) 『中國文學論集』第十號、一九八一年。また、中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』第一部 第一章 孟郊と洛陽（汲古書院、二〇一二年、五十八頁）は、孟郊が杜甫の「狂」を承けて、白居易よりも約二十年前に、「狂」の詩境を詠じており、白居易へと繼承された可能性を指摘している。

なお、中國古代の知識人と「狂」の関係については、矢嶋美都子『佯狂——古代中國人の處世術』（汲古書院、二〇一三年、参照。唐詩における楚狂接輿の故事をふまえた「狂歌客」（狂歌者・狂歌老）を自稱とする用例について考察されており、白居易についても第四章に一節が割かれている。

(8) 杜甫の「狂夫」については、前掲の二宮論文（五五―五九頁）でも指摘されているが、後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ 唐詩を読むために』「狂夫」（東方書店、二〇〇〇年、谷口眞由実執筆）に詳しい。

(9) 「閑」に關しては、例えば劉禹錫の「春日書懷、寄東洛白二十一楊八二庶子」（『全唐詩』卷三六〇）に、「心知洛下閑才子、不作詩魔卽酒顛」とある。

(10) 「獨」字を冠した〈自稱〉表現を、謙稱と見做すのはやや無理もあるが、便宜上ここで注記しておきたい。たとえば、貞元二十年頃の作、「冬至夜懷湘靈」（卷十三 〇六六一）では

「獨眠人」、渭村退去時の「東墟晚歇」（卷十二 〇五八六）では「獨行者」、寶曆二年の「郡中閑獨、寄微之、兼寄崔湖州」（卷五十四 二四五七）では「獨吟人」と稱し、大和三年の「葦池上舊亭」（卷五十二 二二八五）では「獨宿翁」、大和五年の「與諸道者同遊二室、至九龍潭作」（卷五十八 二八八四）では「獨往客」、大和七年の「微之・敦詩・晦叔相次長逝、歸然自傷、因成二絕（其一）」（卷六十四 三〇七八）や、大和九年の「龍門送別皇甫澤州赴任、韋山人南遊」（卷六十五 三三二二）では「獨遊人」とも稱している。

(11) 谷口眞由実「杜甫の自稱表現と「北征」詩——「杜子」と「臣甫」を中心に——」（『お茶の水女子大學中國文學會報』第三〇號、二〇一一年）によると、杜甫の詩中に見られる名前などを附した自稱表現は、杜子1例・甫6例・子美1例である。また、『全唐詩索引』（中華書局など）で検索すると、元稹には積1例・微之1例、劉禹錫には劉郎2例・劉生1例・劉子1例のみ見られる。

なお、川合康三『中國の自傳文學』（創文社、一九九六年、三十一頁）によると、中國古典の自傳（的記述）においては、自身を姓名で語るのは自然なことであり、一人稱代名詞を用いる方が、かえって特別な意味を帯びる、と述べている。

(12) 『愛知縣立大學外國語學部紀要 言語・文學編』第三十三號、二〇〇一年、四〇八―四一頁、参照。

(13) 詩の序における用例として、「三月三日、祓禊洛濱」（卷六十六 三三二二）の序、「胡・吉・鄭・劉・盧・張等六賢、

皆多年壽、予亦次焉、偶於弊居、合成尙齒之會、……」（卷七十一 三六四〇）の後序などがあり、詩題では「刑部尙書致仕白居易和」（卷七十一 三六三七）がある。

なお、王拾遺『白居易生活系年』『白居易世系』（寧夏人民出版社、一九八一年、四頁）は、「阿連」を白居易の幼名とし、自稱する例が三首あるとするが、朱金城『白居易研究』『讀白居易詩札記（一）』（三〇一―三〇三頁）や神鷹徳治『白居易・白行簡の幼名について』（『中國中世文學研究四十周年記念論文集』白帝社、二〇〇一年）等では、「阿連」は幼名ではなく、自稱は一首のみと考證されている。

(14) この時、白居易が發症した「風疾」については、小高修司『唐代文人疾病攷』『二 白居易「風痺」攷』（知泉書院、二〇一六年）に、中國醫學の立場から考證されている。

(15) 例えば、姚合の「和李十二舍人裴四舍人兩閣老酬白少傅見寄」（『全唐詩』卷五〇一）には、「林中長老呼居士、天下書生仰達人」という句が見える。

(16) 白居易の名と字がその人生において持つ意味については、松浦友久『漢詩——美の在りか——』（I）詩人とその詩境——白居易（岩波新書、二〇〇二年、八〇―八三頁）、參照。

(17) 北宋以降の雅號の流行については、合山究『雅號の流行と宋代文人意識の成立』（『東方學』第三十七輯、一九六九年）に詳しく論じられている。

〔前編訂補〕

〇二六頁上段三・五行目：「南賓主」↓「南賓守」
 〇四〇頁注（1）一一行目：谷口眞由美「杜甫詩における自稱表現——杜陵の野老を中心に——」↓谷口眞由美「杜甫詩における自稱表現——「杜陵の野老」を中心に——」
 〇官職名に關する自稱詞として、公府吏・島夷師・疎散郡丞・郡吏・紫薇郎・紫薇翁・留司官・分司叟などもある。

〔付記〕

岡山大學の橘英範先生より、文獻資料の御惠贈に與りました。記して感謝申し上げます。

* * *

作者：高橋 良行

Author：TAKAHASHI Yoshiyuki

標 題：白居易詩中的自我稱謂——圍繞宗教、謙稱與姓
 字——

Title：First-person Expressions in Bai Juyi's Poems——
 Concerning His Religion, Modest Appellations and Family/
 Courtesy Names

摘要…通讀白居易的詩會發現，除「我」「吾」「余」「予」等第一人稱代名詞之外，他從各種方面來稱呼、認識自己的語言表達要遠多於其他詩人。這種自我稱謂有兩百數十種之多。

這種自稱一部分為複合型，較難進行截然區分，但大致上可分為…①由官職得名②由身體情況得名③由年齡得名④與詩酒相關⑤宗教性、趣味性稱謂⑥謙稱、卑稱⑦由姓、字而來的稱謂及其他。

本稿圍繞⑤⑦的自我稱謂，對其中反映出的白居易心理及內心世界進行了初步的分析和考察。宗教性的自稱多與佛教相關，而趣味性的則不那麼多。冠以「不才」「愚」「野」「狂」等謙稱類自稱中，可以觀察到白居易將負面價值轉為了正面價值。將官職和姓同用及用到「字」「樂天」的這類自稱，屬於白居易個人的顯著特色，反映出他身為白氏一族的榮耀感以及對自己字的深切喜愛。

從結論上來說，這類自我稱謂是白居易的自我喜愛、過剩的自我意識以及自我流露的產物，是他本人多種多樣的自畫像。可以認為，白居易本人及其友人都對於這類繁複的自我稱謂樂在其中。

關鍵詞…白居易 自我稱謂 宗教 謙稱 姓 字